

やす だ のぼる

安田 登

能楽師（下掛宝生流：ワキ方）

寺子屋 講師 （阿弥陀寺）

こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こまだったときの 親鸞聖人の 鳥



イラスト 中川 学

枕石

した。
皆さまはいかがでし
うか。好きな漢詩、あ
りますか。

「正信偈」の続き、
なかなか書けませ
んが、今回もちよつと違
う話をします。
親鸞聖人の「正信
偈」は漢詩です。
阿弥陀寺さんの寺
子屋でも何度か漢詩
のお話をして
います。私
は漢詩が大好
きです。漢詩
というのは昔
の中国の言葉
で書かれた詩
です。聖徳太
子の飛鳥時代
から日本人に
も親しまれ、
読むだけでな
く、作る人も
たくさんいま

…と聞くと、この頃は
「漢詩なんて知らない」
という人が少なくありま
せん。
漢詩で有名なものとい
えば、まずは「春眠曉を
覚えず」、いかがですか。
春のうららかな日。寝坊
をするから夜明けなんて
知らないよ、という詩で
す。「え、それ漢詩だつ
た？」という方もいるで
しょう。そう、これ、漢
詩なのです。

▼枕石の漢詩

今回は、親鸞聖人のこ
とを詠んだ漢詩を紹介し
ましょう。

作者は明治の人で、松
口月城。熊本医学専門学
校、いまの熊本大学医学
部で医学を学び、なんと
十八歳でお医者さんにな
ったという天才。医学
のかたわら漢詩や書画も
たしなんでいました。
親鸞聖人が地方の布教
の途中、大雪に遭います。
そこで一夜の宿を乞うの
ですが、断われた、そん
な親鸞聖人のことを思っ
て詠った詩です。

「親鸞聖人雪中布教の
図に題す」というタイト
ルです。

《原文》

北越寒風夜四更
門前臥雪若爲情
緇衣烈烈救世願
珠數琅琅念佛聲
さむくとも

袂に入れよ 西の風
みだのくにより
吹くと思えば

當時枕石今猶在
長仰南無六字城

漢詩ですが、途中で親
鸞聖人の「さむくとも」
の和歌が入っていますね。
では、二行ずつ、書き
下し文にしながら読んで
みましょう。

▼雪の中の聖人

北越の寒風夜四更
門前雪に臥す
若為の情ぞ

北越で布教の旅をして
いた親鸞聖人は、民家に
一夜の宿を乞うたのです
が拒まれます。大雪も降
り、寒風も吹きすさぶ、
四更（午前2時頃）。寒

そうですね。

親鸞聖人は仕方なく、
石を枕にして、雪の中で
眠ります。それが「門前
雪に臥す」です。熊本だつ
て冬は寒いのに北越。ど
こでしょう。親鸞聖人が
流された新潟かも。新潟
の冬といえば屋根までの
積雪に外に出られないな
んてニュースも見ます。
ちなみに、ここは常陸
国、いまの茨城県だとい
う説もあります。茨城も
筑波山から吹き下ろす風
が寒そうですね。

そんなところで石を枕
にして寝た親鸞聖人。そ
れを「若為の情ぞ」と詠
います。「どんなお気持
ちだったろうか」と思
いを馳せるのです。
最初の二行だけで、も
う寒くて、寒くて、たま
らなくなりますね。
私たちも親鸞聖人の寒
さに思いを馳せてみま
しょう。

▼美しい念仏の声

次の二行です。
緇衣烈烈 救世の願
珠數琅琅 念仏の声

この二行は同じような
リズムのことばが対に
なっています。こうい
うのを「対句」といいます。
「緇衣」というのは墨
染の衣です。お坊さんの
制服。むろん親鸞聖人の
ことです。それが「烈烈」
とあります。「烈烈」と
いうのは力強いこと、激
しいこと。また山を烈烈
というとても高いとい
う意味があります。その
すべてを含んだ言葉です。
親鸞聖人の教えは、私
たちにとってもやさしいの
ですが、あのお顔、ちよつ
と怖く感じることも、あり
ません。内心は「烈烈」
たる親鸞聖人です。

で、何に「烈烈」か
というと「救世の願い」、
世を救うという願いです。
どこから、誰から何を言
われても動じない。その
力強さが烈烈たる救世の
願いです。

次の「珠数」は数珠の
ことです。それが「琅
琅」となります。「琅
琅」の左（王）は「玉偏」で
す。「琅琅」というのは
玉という宝石がリンリン、

リンリンと美しく鳴る音で、これは数珠の音とともに、親鸞聖人の念仏の声でもあります。美しいお声だったのでしょうね。

▼極楽からの風

ここで親鸞聖人の和歌が挿入されます。

さむくとも

袂に入れよ 西の風

みだのくにより

吹くと思えば

やはり和歌はわかりやすいですね。意味がすんなりと入ってきます。

西の風は確かに寒い。しかし、それを拒まず袖に入れよう、と詠います。なぜなら西の風は阿弥陀様の御国、西方浄土から吹いてくる風だからと思うから。

おお、なるほど！

これから、西から冷たい風が吹いて来たら「あ、阿弥陀様のお浄土からの風だ」と思いましよう。極楽からの風です。

ちなみに北風の北方は弥勒菩薩の浄土、兜率天

です。

▼永遠に仰ぐ

そして、最後の二行です。

当時の枕石 今猶在り
長く仰ぐ 南無六字城

「当時の枕石 今猶在り」というのは、降雪、寒風の中で親鸞聖人が枕にしたという枕石が、まだあるということです。

「南無六字城」というのは南無阿弥陀仏の六字の教え、その教えや親鸞聖人を私（作者）はもちろん世の中の人々は長く仰いでいる、そう締めます。

▼枕石寺

当時の枕石がまだあると詩に詠いますが、いまでも茨城県の常陸太田市にある枕石寺というお寺に、この枕石が遺跡としてあります。

実はこの枕石寺を建てたのが、親鸞聖人に宿を断った男だと言われています。名前は道円。出家する前は武士でした。北面の武士といって上皇の

御所の守護などにあたった武士です。

罪を得て、この地に流されていましたが、ある雪の夜に当地を訪れた親鸞聖人に一夜の宿を乞われましたが、それを断つた。そこで親鸞聖人が

「さむくともたもとに入れよ」の和歌を詠み、石を枕に身を横たえた。親鸞聖人の偉大さに感銘を受けた道円が聖人の弟子となり、寺を建てて「枕石寺」と名付けたと言われています。

お寺の本尊は、水戸黄門様、徳川光圀公が寄贈した阿弥陀如来で、寺宝として親鸞聖人の御真筆とされる六字名号、大海の文字が刻まれた、親鸞聖人が横たえたという枕石が所蔵されています。

▼出家とその弟子

ところがこのお話、倉田百三という人が『出家とその弟子』という戯曲（劇の台本）の中にも書いています。この話は第一幕にあります。そこでは宿を断ったの

は日野左衛門という獵師としています。

断るだけでなく「早く出て行け。この乞食坊主め」と親鸞聖人を杖で打ちます。

雪の寒風吹きすさぶ中で、石を枕に親鸞聖人の一行は寝ます。左衛門は暖かい家の中で寝るのですが、薄暗い竹やぶで自分が一羽の鶏を生きたまま羽むしりにしているという夢を見てうなされます。

心配する妻に彼は夢を語ります。丸太に鶏を押さえつけ、羽を一本ずつ抜き、鶏が苦しんで鳴く声に、夢の中の左衛門はむしろ残酷な快感を覚える。そこへ妻であるお兼が現れ、「鳴かせるのはやめて」と頼むので、今度は鶏の首をねじって黙らせようとしますが、毛の抜けた鶏はまだ走り出す。

やがて左衛門は鶏の首を包丁で切ろうとして、地面に押さえつける。その時、鶏と目が合い、訴えるような鳴き声を聞いた瞬間、夢の中で自分がその鶏の側に「入れ替わって」しまう。自分が殺される側となつて悲鳴を上げる左衛門を、「鶏つぶし」の男が冷然と見下ろしている。そのとき彼は、前世で自分が山中で旅の女を脇差で殺した記憶を突然思い出します。

今、鶏として味わっている恐怖と哀願の声は、そのときの女の泣き声の「報い」だと悟り、「ああ地獄だ」と感じる。屠殺者の包丁がいつ落ちるか分からない恐怖の中でうなされて目が覚め、思い出すだけでも魂の底が冷えるような悪夢だったと震えながら妻に語るのです。

後悔した左衛門は親鸞聖人一行を家の中に入れて、話を聞きます。

親鸞聖人はこう言います。「私は信じます。人間は善くなり切る事はできません。絶対に他の生命を損じない事はできません。そのようなものとしてつ

くられているのです」それを聞いて驚いた左衛門は「あなたも罪人ですか」と問うと、親鸞聖人は言います。「私は極重悪人です。運命に会えば会うだけ私の悪の根深さがわかります。善の相の心の眼にひらけて行くだけ、前には気のつかなかった悪が見えるようになります」と。

そのような話をしていくうちに夜も明けます。親鸞聖人は左衛門に別れを告げ、「私はあなたがたを忘れません。別れていてもあなたがたのために祈ります」というと、左衛門も「私もあなたを一生忘れません。あなたのために祈ります」と言い、第一幕が終わります。

本戯曲は罪深く、さびしく、愛欲に揺れる人間が、そのまま仏の慈悲に包まれるまでの物語です。ぜひ、続きもお読みください。台本ですから、何人かと役を割り振って朗読するのも楽しいと思います。